

道徳科の評価

1 道徳科の評価の前に

(1) 評価は単独では存在しない

評価は単独では存在しない。評価は、目標、計画、実施（指導）と一体であるということである。これをサイクル化するとPDCAになり、カリキュラム・マネジメントの根幹になる。目標に基づいた計画がなされ、その計画を実施し、評価し、目標が実現できているかどうかを診る。そうして、改善を加え、再び目標、計画、実施、評価のスパイラルに入る。目標が実現できていないとしたら、どのように改善するかを探る。この連続性の中で子どもは教育活動を展開しているはずである。言い方を換えれば、目標や計画、指導と関係なく評価が実施されることはあり得ない。子どもの姿は、目標、計画、指導の反映されたもので、それは子どもの目標実現の状況として顕れる。それを診るのが評価行為なのである。

(2) 評価の三態、めざすは改善

評価は子どもを「ください」ために行うのではない。あなたは癌ですと診断し、その後治療行為をしなかったら、それは地獄行きの宣告に等しい。評価によって見える子どもたちの今は、目標を含む教育課程とそれに基づいて行われる指導との関係において表れる。(1)で述べたとおりである。だから評価は三態。教育課程の評価、指導の評価、そして子どもたちの評価である。ともに目指すのは改善・向上である。

(3) 評価観を問い直そう

学習評価は評価事務として捉えられがちである。評価して成績を出す、このことを中心に評価観を抱いていたとしたら、それは問い直したい。

「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できる

ようにすること。」これは第1章総則（以下「総則」第3の2(1)に述べられている指導の評価と改善の冒頭である。さらに「解説」（以下「解説」）では、「特に」として、①他者との比較ではなく生徒一人一人のもつよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握すること。②年間や学期にわたって児童がどれだけ成長したかという視点を大切にすることが述べられているが、これは、「総則」に掲げられている以上、全領域に共通する評価観であることに留意すべきである。道徳教育も道徳科も、この評価観が踏襲されて、評価のありようが示されているのである。

2 道徳教育及び道徳科の評価

(1) 道徳性は評価可能か、必要か

道徳に評価は必要か。また評価はできるのか。この問いの答えを追究することが、道徳に係る今次評価改善の理解を生む。

中学生A, B, Cが座っている満員電車の中に杖をついた老人が乗ってきた。ここに表れる行動は様々である。Aはとっさに席を立った。Bは満員電車であるが故に席を立つことは、自分だけでは済まず満員の立っているお客さんを動かすことになど考え、そのまま座っていることにした。Cは老人に席を譲るといい子に思われ、格好いい。そう思って席を譲ってみた。

席を譲ったのはAとCだが、Cは道徳的価値観に基づいた行動とは言えない。Bは席を譲らなかったとはいえ、状況の中で自分の処し方を考えている。さて、その子なりの道徳性をどう見取るか。いやいや、その行動の内面はそう簡単に見取ることはできない。

道徳性は内面的資質。態度や行動等可視化できることは、それなりに評価できようが、内面を評価するのは察するしか術はなく、容易なこ

とではないのである。

道徳科の授業は目標を含む計画に基づいた指導であるから、当然評価は行われるべきだと言われる。確かに、そのとおりで、「数値等による評価は行わない」というのは、数値によらない評価は行うということである。だが、それをどうするかである。道徳性は道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲・態度を構成する諸様相としている。一時期、それらを観点にして評価することや、思いやり・親切、礼儀などという内容項目に基づいて評価することなどが取り沙汰されたことがあった。果たして、それらは可能だったのか。

道徳性は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤だという。それを養うのが道徳教育の目標であるが、何をもち、それを養えたかどうか評価するのだろうか。

指導内容も「教師と生徒が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題」とされており、内容項目も、「道徳的価値を含む内容を、短い文章で平易に表現したもの」で「生徒自らが道徳性を養うための手掛かりとなるもの」とされている。いずれも漠として解釈は多様である。内容項目毎に評価するとしても、中学校内容項目B(7)礼儀は「礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること。」となっており、礼儀の定義というより、指導の内容であることに気づかれるであろう。「友情」「思いやり」とは何かを問えば、ほとんどの教師は曖昧にしか答えられない。当然である。友情も思いやりも、それ自体が文学のテーマにもなりそうな大命題で、簡単に定義づけられるものではないからである。友情や思いやりは、人それぞれにその表現の仕方も理解も一様ではなく、「友情」とはこういうものかなどとは、とても定義できるものではない。だから、内容項目は、「窓」とか「手掛かり」なのである。定義の

はっきりしないものを、「養えたか」とそのゴールへの到達度を評価できるはずがないのである。

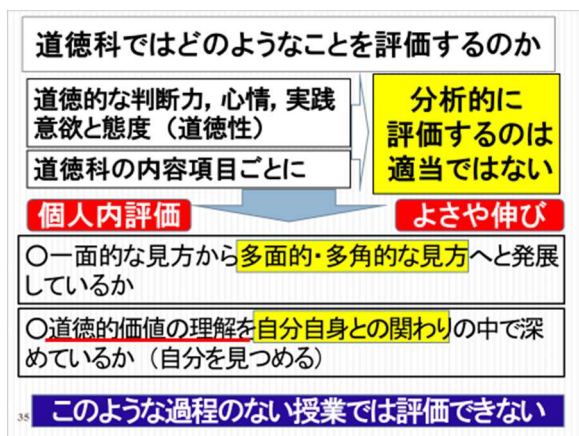
(2)評価するのは学習過程における成長

(1)で述べたように目標が目指している道徳性そのものを評価できないとしたら、道徳教育や道徳科の評価は、どうすべきなのか。道徳性は内面的資質であり、道徳性を育むには、子どもの主体性に依らざるを得ないことについては、前号「道徳教育の基礎基本」で述べた。この点を踏まえると、述べてきたような内容項目や道徳性を構成する諸様相を観点別にしたような分析的な評価をすることは、適切ではない。そう断じた解説は当然で明快である。また、そのような評価を実施したところで、「主体的に道徳性をはぐくもうとする」道徳のアクティブ・ラーナーを育てるのに、ほとんど寄与はしないことも明らかであろう。

他者との比較のような相対評価ではなく、個人内評価として生徒一人一人のもつよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、年間や学期にわたるなど、大きくくりの中で、生徒がどれだけ成長したかという視点で生徒を見つめる。そうして、時間軸による縦の伸び、多面的・多角的なものの見方・考え方の積み重ねによる価値観の広がりといった生徒一人一人の人間的な成長を見守り、生徒自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付けるようにすること。それは評価というより指導の要素が強く評価行為自体が指導の一貫をなしていると解すべきである。このような働きかけを伴った評価なくして、自らが、自立した人間として他者と共によりよく生きようとする実践（行動）にはつながってこない。

3 道徳科の評価 学習状況の評価

道徳科では「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して…」と学習の過程が目標に記述され



ている(注1)。この学習状況を評価しようというのが今回の改訂である。すなわち、この学習の過程において「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」を評価するのである。学習の「広がり」、「高まり」、「深まり」である。

どのような表れに着目すべきなのか。

例えば「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」については、「自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしているか」、「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」については、「道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めているか」等が解説には例示されている(注2)。それらを授業過程において子どもの姿から感じ取ったり、授業後の作文、ノート等から読み取ったり、評価の手だてを工夫したりして、多様な視点をもつことが重要である。

さらに、教科担任制を引いている中学校においては、学年集団を学級と捉えて、多様な教師集団が指導や評価の工夫を加える中で、情報を共有し様々な角度から、「生徒がいかに成長（変容）したかを積極的に受け止め、認め、励ます評価」を行うようにしたい。

また、道徳科の評価では自己評価の重視が謳われている。自己評価は、生徒が自分を見つめる内省の機会にもなり、指導面では励まし勇気づける手がかりにもなる。評価行為を評価で閉

じずに子どもの内面にいかに働くものにするか、そこに道徳の評価の意義があり、道徳評価の基本があるのである。

評価の心は、「長い目で、広い目で、多くの目で」。目では愛で、である。

3 結びにかえて 道徳の評価事務から

今次指導要録の改善で、新たに成長の記録等を文章で記述する特別の教科道徳欄が設けられた。この欄が、「道徳に係る成長の様子」になっていることに留意したい。通知表等において、この趣旨を踏まえて、生徒の道徳に係る成長を記録することは、生徒への温かな励ましになると同時に生徒自身が自分自身の成長を見いだすことになるからである。

では、学校教育全体の道徳教育の評価は、どこに記述するのか。従来から行動の記録欄の記述要素の中には「道徳」が含まれていた。道徳性は内面的資質。それと道徳的実践（行動）は直結しない。そこには深くて広い川があり、その間には、道徳科での学習の深まりや高まりがあり、教師や生徒との信頼関係に基づいた生徒自らが自らの道徳的な成長を図る営みがある。よりよく生きようとする姿である。それを肯定的に評価しながら、励まし、勇気づけるなど適切な指導を行いながら成長を扶けるのが道徳指導である。だとしたら、この行動の記録の評価へのアプローチは、「くだす」のではなく、「生かす」姿勢で臨みたい。生徒を総合的に理解する機会にし、生徒の自己理解の一助にしたいのである。

結びに、道徳科の「評価文例集」が発刊されているが、その文例をもって、評価事務に臨もうとしたら、その瞬間に道徳教育は水泡に帰すると申し上げたい。一人の成長する生徒像は教師の中にあるのだから。

(注1) 中学校学習指導要領（平成29年3月）p139

(注2) 中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編（平成29年7月）p111